



編集月旦 2015年6月号

★6月12日、9時8分から霞が関中央合同庁舎第8号館1階の記者会見室で、有村治子大臣（共生社会政策担当）は、閣議決定された平成27年版「高齢社会白書」（高齢化の状況及び高齢社会対策の実施の状況に関する年次報告）の記者発表をおこないました。

☆内閣府発表の「発言要旨」によりますと、有村治子大臣は、

「・・・一人暮らしの高齢者に関する意識調査の結果をもとに特集を組んでいます。「日常生活における最も大きな不安は何ですか」と伺ったところ、複数回答ですが、トップに「健康や病気」とお答えになった方が全体の58.9%となったことなどを紹介しています・・・」というもの。あとは事例紹介をして、もうひとつの「犯罪被害者白書」についての報告に移って9時21分に終わっていますから、上記が「高齢社会対策」担当大臣としての記者発表のすべてだったのでしょうか。記者から関連質問はありませんでした。

☆「健康と病気」の不安が58.9%に・・・これでは1年間の事業をまとめた「白書」の骨子が記者に伝わらず、一般の高齢者に伝わるはずがありません。「白書」には、・高齢化の状況 高齢化率 ・環境の現状と動向 家族と世帯 経済状況 健康・福祉・介護 就業 社会参加 生涯学習 生活環境 生きがい ・一人暮らし 生活の不安 現在の楽しみ 人との付き合い 将来への準備 といった項目で、仔細な報告がなされているのですが。

☆本号では、その中から本稿の関心で27点の統計表を選んで取り上げました。説明を分かりやすく変えたところがありますが、事業への評価はしておりません。

★人口推計「65歳以上の年齢別男女別人口表」は、ご自分の生年に印をつけてみてください。まだお若いこと、たくさん仲間がいることに気づかれるでしょう。65歳以上の高齢者（史上初の高齢社会をつくる人びと）3300万人はほぼピラミッド型をしています。60（65）歳から75歳は成熟期、75歳から90歳が円熟期。それからが達成期（余生）とっていいでしょう。もちろんこれは本稿の気ままな推測による3分割ですから、それぞれご自分で3つに割ってみて、ご本人が納得されればいいことです。

☆「三世代表」は、人口ほかの修正をしたうえで、合わせて掲載いたしました。去年はすべての「団塊世代」の人びとが高齢者側に移り、今年が昭和20年生まれが古希・70歳に達し、大正14年生まれが傘寿・90歳に達します。ですから90歳代はすべて大正生まれの人びとです。

★人口減少によって896自治体の消滅可能性を予測した創成会議（増田寛也座長）が、こんどは急激な高齢化のために東京圏での医療・介護施設の対策が懸念される一方、全国41の受け入れ態勢のある地域をとりあげて「地方移住」を解決策とする提言をおこないました（6月4日）。

☆現代版「うばすて」論といって斬り捨てるのは簡単ですが、若い世代の就労、結婚、子育てによる「地方創生」と合わせた高齢者参加による自治体の活性化をめざす「新地域支援構想」が本筋です。創成会議のいう「地方移住」では地方に新たな活力を生みません。

☆論考『丈人力のススメ』の「その二 マイホームパパとママの憂鬱」を掲載いたします。家族の崩壊がすすんでいます。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり、高齢者の課題であり、本誌の目標です。（編集人 記）

